



□実施者

◀教 員> 千葉工業大学 創造工学部 都市環境工学科 教授 鎌田元弘

千葉工業大学 社会システム科学部 プロジェクトマネジメント学科 教授 加藤和彦

◀参加者> 千葉工業大学 創造工学部 建築都市環境工学科【鎌田研究室】

2018) 芥 (4), 新堀 (4), 望月 (4) 計 3 名

2019) 芥 (M1), 三宮 (4), 高岡 (4), 高木 (4), 東田 (4), 森 (4), 山下 (4) 計 7 名

千葉工業大学 社会システム科学部 プロジェクトマネジメント学科【加藤研究室】

2018) 加瀬 (M1), 竹山 (M1), 青木 (4), 小林 (4), 千葉 (4), 南部 (4), 秋本 (3), 今村 (3), 大場 (3), 小名木 (3), 小沼 (3), 木村 (3), 近藤 (3), 茂原 (3), 辻 (3), 永倉 (3), 早川 (3), 山本 (3) 計 18 名

2019) 加瀬 (M2), 竹山 (M2), 秋本 (4), 今村 (4), 大場 (4), 小沼 (4), 小林 (4), 木村 (4), 近藤 (4), 茂原 (4) 計 18 名
辻 (4), 永倉 (4), 早川 (4), 山本 (4), 上野 (3), 大利 (3), 尾形 (3), 神谷 (3), 佐藤 (3), 菅間 (3), 田畑 (3), 中嶋 (3), 西山 (3), 長谷川 (3), 林 (3), 若松 (3), 渡邊 (3) 計 27 名

◀協働パートナー>

【行政】南房総市市民生活部市民課市民協働グループ, 大井区会, 大井区自主防災, 大井区子供会, 青空クラブ, 氏子会, 入宇田組, 細田組, 茂沢組, 五反目組, 西谷組, 本郷組, 下組, みねおかいきいき館

背景と目的

目的: 地域が望む将来像に合わせた新たな地域運営の仕組みづくりと次世代のリーダー発掘・育成を行い、持続可能な集落を形成する。

目標: 集落ビジョンの提案と実践、活動拠点の整備。

実施内容

(1) 2018 年度

持続可能な集落創造の目標のもと、大井区における集落課題やステークホルダの関係把握のため、2017 年度に引き続き学生による聞き取り調査を継続して行った。また本年度より、地区の祭礼や行事に積極的に参加し、区民と交流を深めた他、学生の活動拠点として古民家を整備し「学び舎じんべゑ」として運用を開始した。区民への調査から実現へ至った 1 つの成果として、大井区にとって初の試みとなる「大井区民どんど焼き」の開催を行った。

(2) 2019 年度

持続可能な集落創造の目的のもと、大井区における地域運営の現状やステークホルダの関係把握のため、昨年度に引き続き学生による聞き取り調査を継続して行った。また昨年度に引き続き、地区の祭礼や行事に積極的に参加し、区民と交流を深めた他、「学び舎じんべゑ」を学生の活動拠点や宿泊拠点として本格的に運用を行って。また、台風 15 号に伴う区内の支援活動にも参加した他、山間集落の防災組織などについての調査研究も本年度より行っている。昨年度より開催している、区民への調査から実現へ至った「大井区民どんど焼き」を本年度も執り行った。最終的な持続可能な集落計画の策定へ向け、昨年度より、移住した「定住人口」でもなく、観光にきた「交流人口」でもない、当該地域の人々と多様に関わる人たちである『関係人口』による地域の活性化についての研究を継続しており、大井区における各活動内で、関係人口が地域に及ぼす影響について調査を行っている。



* 左ページ

1 どんど焼き櫓組立て (2019/1/13)

2 どんど焼き当日 燃え盛るどんど焼き (2018/2/03)

* 本ページ

3 次世代の中核区民 意見交換会 (2018/9/14)

4 子供会の夏イベントに参加 (2018/8/18)



域学協働の工夫！

★地域内のコミュニティの枠にとらわれないサポーター人材を発掘・育てること

★地域内の次世代中核人材が（モチベーションアップや訓練としての）チャレンジできる場を創出すること

★マンパワー・活力としての学生が存在すること

★公益性のあるドライバー（学生・教員等）により地域住民の意見を抽出すること

★遊び心、余裕を持つこと

成果と課題

●地域貢献

(1) 2018 年度

「次世代の中核区民」への聞き取り調査から実現へと繋げることができた「どんど焼き」の企画から行事当日までの調査によって以下の仮説が立てられた。

① 次世代中核区民のチャレンジの場の存在

② 組、各団体の枠にとらわれない行事の開催

③ 各世代にリーダー層の存在

④ 先入観の無いファシリテーター（学生・教員等）の存在、及び彼らによる、区民の意見の調査

⑤ マンパワーとしての学生の存在

これらが持続可能な集落創造の鍵となる。次年度は、更なる調査によって、これら仮説の立証や再考が必要となる。また④、⑤の説が正しいと仮定すれば、本年度にほぼ整備が完了した、千葉工業大学生の拠点「学び舎じんべゑ」の運用も大いに貢献があったと推測される。

(2) 2019 年度

本年度は、持続可能な集落ビジョン策定を目指す上で、新たな地域運営の仕組みづくりの面と大学・市・地域住民の連携面の 2 つの調査研究を行った。新たな地域運営の仕組みづくりの面では、まず現状の地域住民、行政、大学など、プロジェクトに関わるステークホルダのプロジェクトに対する期待事項を調査し、形式概念分析を用いて利害の構造化を試みた。

その結果、

- ・プロジェクト全体で共通の期待事項は無いこと
- ・地域住民側には全体が連携して行うことが難しい期待事項が多いこと
- ・地域住民側の中でも、自治会と数年後の自治中心者との間で期待事項が一致していない
- ・行政側と大学側の期待事項が大きく乖離している

などの現状が明らかとなった。これらの結果及び分析手法は、今後のプロジェクト運営および、地域運営の仕組みづくりの基礎になると考えられる。



5



6



7

* 本ページ

- 5 整備活動中の学び舎じんべえ (2018/08/04)
- 6 秋祭礼（屋台運行）に参加 (2018/10/13)
- 7 大井神社祭礼での神輿担ぎ (2019/9/14)

* 右ページ

- 8 次世代の中核区民 意見交換会 (2019/9/14)
- 9 台風 15 号被災地域でのがれき撤去作業
- 10 大井柚子の収穫
- 11 大井柚子の収穫

次に、大学・市・地域住民の連携面では、定住人口、交流人口、関係人口のそれぞれの人材が活動することによって、地域にどのような影響を及ぼすのか、地域住民へのアンケートやインタビューによって調査した。

調査の結果、以下のことが明らかとなった。

- ・定住人口の活動：「地域リーダーの認識度」の大幅な向上
- ・交流人口の活動：大きな影響は見られず
- ・関係人口の活動：「地域への愛着度」、「住民参加意向度」の大幅な増加

※住民間の交流度、住民間の団結力、若年層の活動度は、各種人口の活動に関わらず年々低下傾向であった。この調査研究により、関係人口である大学生が関わることによって地域に対してどのような影響を及ぼすことができるのか、明らかとなった。

●教育面

今回の実プロジェクトにおける聞き取り調査や各行事への参加などによって、地区の特徴、課題を明らかにすることは、農村計画等における課題と特徴の整理の観点とステークホルダの要求の抽出という観点で、建築都市環境学科とプロジェクトマネジメン

ト学科の双方にとって研究面の成果があったと考える。加えて、大学での学びを実践する機会を得られたことによる教育面の効果もあったと考える。

今後について

地域における調査研究により、関係人口である大学生が関わることによって地域に対してどのような影響を及ぼすことができるのか、明らかとなった。これらの結果を基礎として、今後の大学と地域の連携による持続可能な集落創造計画策定へ向けた取り組みを継続し、引き続き聞き取り調査や各行事への参加、更に既存の行事や新規の行事などに対する大井区民の意見等を調査することが必要となる。



8



9



10



11

*表彰・マスコミ掲載など

- ・2019/02/06 房日新聞 4 面「大井地区どんど焼き」
- ・芥 雄次 : 限界集落における集落機能維持に向けた組織構成について - 千葉県南房総市の限界集落を事例として -, 農村計画学会 2018 年春季大会 予稿集, 2018
- ・加瀬匠汰朗, 加藤和彦: ステークホルダが持つゴールとタスクの定量的評価手法の考察 - 産官学連携プロジェクトにおける複数ステークホルダ間のジレンマの解消 -, プロジェクトマネジメント学会 2018 年度秋季研究発表大会予稿集, pp.594-599, 2018
- ・ShotaroKASE, KazuhikoKATO : Elimination of Dilemma among Multiple Stakeholders in Industry-Government-Academia Collaboration Project, Proceedings of the 12th International Conference on Project Management, pp.18-23, 2018